

社会史研究に基づく歴史授業構成（Ⅲ）

―集合心性に着目した「土一揆」の授業構成と実践分析―

原 田 智 仁* 別 府 陽 子**

（平成4年9月22日受理）

1 はじめに

フランスのアナール派に象徴される「新しい歴史学」としての社会史のモチーフの一つに、心性ないしは集合心性がある。心性とは、フランス語でマンタリテ (mentalité) と呼ばれ、通常広い意味での「こころのありよう」をさすが、必ずしも厳密に規定された理論概念ではない。アナール派に詳しい二宮宏之によれば、それは「人びとのこころの、自覚されない隠れた領域から、感覚、感情、欲求、さらには、価値観、世界像に至るまでの、さまざまなレベルを包みこむ広い概念」¹⁾ である。したがって、集合心性と言えば、そうした個々の人間の感じ方や考え方の集合ととらえられる。もちろん、単なる個々の心性の総和ではなく、そこには集団（全体）としての独自性が見られることは言うまでもない。その点もふまえ、本稿では集合心性を、ある特定の時期の社会（集団）全体にとって共通な心的態度と規定しておきたい。

では、なぜ今、集合心性を問題にするのか。旧来の歴史学や歴史教育では、人間の行為を取り上げる場合でも、行為の因果関係の説明に終始し、行為の意味の探求は等閑視されがちであった。その結果、単純な民衆史観や階級史観に陥ったり、定型的な人間類型（英雄像、農民像など）を生み出すことにもなった。個人であると集団であるとを問わず、人間の行為は心性と切り離しがたく結びついており、心性に着目しなければ行為の真の意味は読み解けない。人間の行為の意味が読み解けなければ、その人間が織りなす歴史の理解もまたおぼつかないであろう。近年、歴史学における社会史研究の隆盛には目覚ましいものがあり、心性に関わる研究も少なくない。歴史教育の分野でも、社会史の成果を生かした教材の開発が期待されている。筆者もそうした視野に立ち、すでにハーメルンの笛吹き男伝説とシャリヴァリを素材とする教材開発を手がけてきた²⁾。引き続き、本稿では日本の土一揆を取り上げ、考察することにした。

研究の手順は次のとおりである。①まず一般的な土一揆認識の実態を明らかにし、その問題点を指摘する。一般的な土一揆認識に関しては、大学生に対するアンケートの結果、教科書の記述内容および先行授業実践の分析をもとに明らかにする。②そこで明らかとなった問題点を克服する土一揆理論を仮設し、それに基づく授業モデルを作成する。なお、授業モデルは中学校歴史的分野を対象とする。③作成したモデルに基づく実験授業を実施し、その結果を分析・考察するとともに、理論仮説の評価を行う。 〈原田 智仁〉

2 一般的な土一揆認識とその問題点

(1) 大学生の土一揆認識

ここでは、1992年5月19日、兵庫教育大学学部1年生に対して実施したアンケートの分析を通して、一般的な土一揆認識の実態を明らかにする。なお、アンケートは記名式で行

* 兵庫教育大学第2部（社会系教育講座）

** 福岡県糸島郡志摩町立志摩中学校

生活苦に陥った農民が集団で鎌や鍬を手に立ち上がり、支配層に対し暴動を起こした。

というものである。徳政に言及したものは少なく、ほとんど江戸時代の百姓一揆や打ち壊しのイメージと変わらない。このイメージを支えていると考えられるのが、〈農民＝貧困(みじめ)＝団結＝暴動〉といった短絡的な論理である。この論理の行き着くところは、英雄的な民衆観(抑圧された農民が支配層に対して勇敢に立ち上がる)か、愚民観(所詮農民は貧しく集団でないとも何もできない)かのいずれかであろう。だが、歴史上の農民の姿は、そう簡単に割り切れるものではない。一揆に立ち上がった農民は、本当に貧しくみじめであったのか。また、農民は果たして暴動のために団結したのか。これらの問いに答えるためにも、まずは、一揆像そのものの再検討が求められる。

次に土一揆に関しては、農民の徳政要求をどうとらえるかが問題になる。だが、数字を見るかぎりその点がきわめて弱い。土一揆の意味ではなく、イメージを問うたことに原因があるのかもしれないが、かれらの土一揆認識自体にも問題があろう。問3の(3)でも、農民の立場は理解できるが、徳政要求は不当だとする見方が約50%を占めている。生活の苦しいのはわかるが、借金の棒引きとは虫がよすぎると言うのだろう。徳政観念を欠いた一揆イメージからすれば、当然の帰結である。他方、農民の立場も理解できるし、徳政要求も正当だとする見方がそれに次ぎ、約30%を占めている。おそらく徳政の観念を理解した上での回答ではなく、単純な民衆史観のなせるわざであろう。歴史を動かすのは常に民衆のたたかいであり、徳政要求も民衆のたたかいであるがゆえに正当だと言うのである。だが、それはあくまで後世に視点を置いた一つの評価にすぎない。当時の農民たちは一体どんな気持ち(正当性の根拠)で徳政を要求したのか、それが問題なのである。まさに、一揆と徳政をめぐる中世の農民の心性が問われていると言える。

(2) 歴史教科書における土一揆記述

先のアンケート結果を見てもわかるように、大学生の土一揆認識の形成において、最大の役割を果たしたと考えられるのが教科書ないし授業である。そこで、まずは教科書の記述内容を分析する。分析の対象としたのは、昭和61年ないし62年発行の教科書、小学校6年上5冊、中学校歴史的分野7冊、高校日本史13冊である³⁾。教育課程の改訂にともない、すでに小学校用の新しい教科書も出版されているが、ここでは中学・高校との比較を考慮し、旧課程の教科書を分析した。具体的には、土一揆に関する記述を大きく背景の説明と行為の説明とに二分し、さらにそれぞれの記述を構成する要素を概念群に整理するという方法をとった。結果を示せば、次のとおりである。

【小学校教科書】

出版社	土一揆の背景に関する要素				土一揆の行為に関する要素					
	飢饉	年貢	借金	民衆の力	農民	集団	武器	反抗	年貢軽減	借金取消
中 学 図 教 育 大 東 書	○	○ ○ ○ ○	○ ○	○	○ ○ ○ ○..	○ ○	○ ○	○ ○	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○

* 「村に住む武士とともに」と地侍に言及。

** 正確には「村」。

【中学校教科書】

出版社	背景				主体			形態と行動					要求		
	飢饉	年貢	自治	商業	農民	馬借	商工業者	団結	交渉	武器	高利貸し	襲撃	借金証文 破棄	徳政令	年貢軽減
中教			○		○		○	○	○		○	○		○	○
学図		○			○	○		○	○	○	○	○	○	○	
教育					○		○			○	○	○		○	
日書			○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○
大書					○	○				○	○	○	○	○	
清水	○				○	○				○	○	○	○	○	
東書		○			○			○	○	○	○	○	○		○

* 「民衆も力を強め」と民衆の成長に言及。 ** 別に「有力な農民や国人」ともある。

【高校教科書】

出版社	背景				主体		形態と行動					要求			
	重税	貨幣経済	借金	土地	惣村	農民	馬借	団結	武力	高利貸し	襲撃	証文破棄	徳政令	年貢軽減	守護排除
第一					○	○		○					○	○	○
学図					○	○	○			○	○	○	○		
実A					○	○			○	○	○	○	○		
実B	○		○		○	○	○			○	○	○	○		
自由		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		
三A		○			○	○		○	○				○	○	○
三B	○		○		○	○				○	○		○		
三C	○		○	○		○	○			○	○	○	○		
清水		○	○	○		○		○					○	○	
東書					○								○	○	
山A		○			○	○			○	○	○		○	○	
山B....					○		○			○	○	○	○	○	
山C	○	○				○	○		○	○	○		○		

- * 「一揆とは特定の目的を持って共同の行動を約束すること」と定義している。
- ** 別に「村の代表者である土豪」とある。
- *** 「都市の住民などともいっしょになって」とある。
- **** 国人一揆の注に、「中世の人々は、ふつうの状態ではなしえない目的を実現するために、神仏に誓約して一致団結した状態（一味同心）の集団をしばしば結成した。これを一揆といい、この時代には、国人一揆のほかには土一揆など種々の一揆が結ばれた。」とある。

これらの表から明らかになるのは、小・中・高のどの段階においても、土一揆の基本的な論理に変わりはないことである。すなわち、土一揆の背景として、一方で重い年貢と借金といった農民の窮状が、他方で惣村に象徴される民衆の成長が指摘される。続いて、土一揆の形態や行動として集団性、武装性、戦闘性が、土一揆の要求項目として主に徳政の実施（借金取消）と年貢の軽減が掲げられる。学校段階が上がるにつれて変化するのは、用語の難解さと、説明の詳細さだけである。また注目すべきは、そうした教科書の土一揆記述と、先に見た大学生の土一揆像とが酷似していることである。ここから、一般的な土一揆認識の形成における教科書（授業）の影響をはっきりと確認することができる。高校の教科書の中には（上表の「山B」の注を参照）、一揆についての新しい解釈を示したのも見受けられるが、全体から見ればごく少数であり、しかも欄外の注での扱いにとどまっている。また、徳政の観念について社会史的視野（集合心性）から説明したのも見られない。

(3) 先行授業実践における土一揆の扱い

ここでは、土一揆（国一揆も一部含む）に関する小・中学校の授業実践を取り上げ、そこにおける説明の論理、すなわちいかなる問い（発問）により、いかなる回答（認識内容）を引き出そうとしているのかを分析する。対象から高校の日本史を除外したのは、先の教科書分析を見ても実質的な土一揆記述の論理に違いが見られなかったこと、また高校では日本史の授業を受講しない生徒もかなりいる（先述のアンケートに答えた大学生の場合、184人中63人が受講していない）ことを考慮したためである。しかもアンケート結果の分析によれば、高校で日本史を受講した者としなかった者との間に、土一揆に関するイメージの差は全く感じられないことから、一般的な土一揆認識は小・中学校の間に形成されると考えられる。

収集した授業は小学校11事例、中学校17事例と数的に限られるが⁹⁾、土一揆授業の一般傾向を把握することはできよう。分析結果を示せば、次のようになる。発問は主要なものに限定し（数字は授業の延べ数）、認識内容も典型的な命題の形に整理した。

発問 (発問の性格)	期待される認識内容	小	中
なぜ、この時代に土一揆は多発したのか。 なぜ人々は一揆を起こしたのか。 (土一揆の原因、背景を求める問い)	惣の結成などで力を強めた民衆は、年貢軽減や徳政令発布を求めて立ち上がった。	2	6
室町時代の民衆は自分たちの願いの実現のためにどうしたか。 (民衆の願いから考えさせる問い)	民衆は寄り合いを開いて団結し、生活を守るために一揆を起こした。	2	2

民衆の一揆を起こす力はどこから生まれてきたのか。なぜ一揆を起こすことができたか。 (民衆の力の根拠を求める問い)	高まる農業生産力、自治による村の団結力、武力が、民衆の力の源泉となった。	6	5
なぜ土一揆は土倉・酒屋・寺院などを襲ったのか。 (土一揆の目的を求める問い)	借金に苦しむ民衆は、借入書の破棄を求めて土倉・酒屋などの高利貸しを襲った。	3	1
土一揆はどのように展開されたか。土一揆とはどんな事件だったか。 (土一揆の主体・目的・行為内容を求める問い)	農民、馬借、地侍は不法な代官の排斥や年貢の軽減、徳政を求め一揆を起こした。	1	7
土一揆の結果はどうなったか。 (土一揆の結果・影響を求める問い)	土一揆により民衆は徳政を勝ち取り、また時には守護を排斥して自治を行った。	2	1
土一揆の起きたのはどのような時代だったのか。土一揆にどんな意義があるか。 (土一揆の意義を求める問い)	土一揆の時代は荘園制の解体期であり、また全国的な民衆蜂起の時代であった。	0	2
自分が幕府の立場であったら、徳政令を出すか、一揆を鎮圧するか。 (子どもに意思決定を求める問い)		0	1

この表から明らかになるのは、小学校段階では一揆を起こした民衆の力を問う授業が最も多いことである。一揆の原因・背景を問う場合でも、中学校では「なぜ一揆が起こったか」と一揆を主語にするのに対し、小学校では「なぜ人々は一揆を起こしたか」と民衆を主語にしている。そのことは、民衆の願いから土一揆を考えさせたり、民衆の生活に焦点を当てて一揆の目的や結果を問う場合にもあてはまる。具体的な人物や人間集団を取り上げ、かれらの願いや行為の意図から歴史に迫ろうとするのは、小学校の歴史学習の一つの特徴である。他方、中学校段階では土一揆という事件を全体的にとらえさせようとする傾向が指摘できる。それは、「土一揆はどのように展開されたか」という問いや、「なぜこの時代に土一揆は多発したか」という問いに端的に表われている。どのようにと問われれば、結局年代順に土一揆の経過を説明するか、あるいは背景・契機・経過・結果・影響などに分けて説明することになる。また、なぜ土一揆が起きたかと問われれば、その背景なり原因を総合的に説明せざるをえない。時代の特色をとらえさせようとする中学校歴史学習の特徴の現れと言えよう。

では、問題はどこにあるのか。まず、第一に「一揆とは何か」という問いがないことである。つまり、一揆の明確な定義をしないまま、その背景や原因、主体、目的などを学ばせようとしている。それほど、一揆とは自明のことであろうか。確かに、教科書や年表を見れば、正長の土一揆や山城国一揆についての記述があり、場合によっては一揆の挿絵などが掲載されている。だが、それらは一揆の一面にすぎないのである。近年の社会史研究によれば、一揆とは本来「起こす」ものではなく「結ぶ」ものだと言う⁹⁾。事件なら起こ

ずと言えるが、結ぶとは言えまい。人間同士が結ぶものと言えば、約束ないしは誓いであろう。そこにこそ、中世における一揆の固有の意味があるのである。

第二に、土一揆の本質が徳政要求にあることが明確にとらえられていないことである。百姓一揆と異なる土一揆の特質は、主体としての農民の階層的多様性(近世的な身分制確立以前の広範な農民層と地侍、馬借など)と、徳政にあると言ってよい⁶⁾。従って、「なぜ土一揆が多発したか」「土一揆は何を求めたか」と並んで、「土民とはいったい何か」「なぜ徳政要求がまかりとおったのか」という問いが不可欠なのである。とくに最後の問いは重視したい。今から15年ほど前、本間昇は自らの土一揆の授業について報告し、子どもたちの大半が農民の徳政要求を言語道断のことと主張したことにショックを受けたと述べている⁷⁾。だが、「借りたものは返すのがあたりまえでしょ」と言う小学生の言い分こそ、今の世の中ではごく普通なのではあるまいか。「被支配者が、権力の横暴に抵抗し、世の中を変えてきた闘争の進歩的意義を強調」するのは、本間氏の個人的な見方にすぎない。むしろ、現代的観点からしたら言語道断とも思えるような要求が、なぜ堂々となされたのかにこそ注目すべきであろう。そのためには、中世民衆の徳政観念が解明されねばならない。

〈原田 智仁〉

3 社会史に基づく土一揆理論と授業モデル

(1) 集合心性に着目した土一揆理論

土一揆の社会史、とりわけ集合心性にまでふみこんだ一揆研究、徳政研究と言えば、勝俣鎮夫と笠松宏至の研究が注目される⁸⁾。ここでは、主に勝俣氏の研究に依拠しながら、社会史に基づく土一揆の理論について考察する。ただし、それはあくまで後の授業モデル作成のための準備的考察であり、勝俣理論のトータルな分析を意図するものではない。その意味で、上述の二つの問い、すなわち「一揆とは何か」「なぜ徳政要求がまかりとおったのか」に対する回答を求めることをねらいとしている。

一揆を通して基層の集合心性を探ろうとする勝俣氏は、まず一揆の正当性と特殊な力の根拠を明らかにする。そこで用いられるのが、「一味神水」「一味同心」の概念である。一揆は単なる目的集団ではなく、「一味神水」という手続きを経て、「一味同心」という連帯の心性を獲得した非日常的な集団をさす。「一味神水」とは、神前において一揆の構成員が、起請文を焼いた灰を神水に混ぜ、皆で回し飲みをすることである。いわば神との共飲共食であり、それによって神との契約、神を媒介とした人と人との契約が成立する。こうして生まれた「一味同心」の連帯の心性こそ、一揆の正当性と特殊な力の根拠となると言うのである。

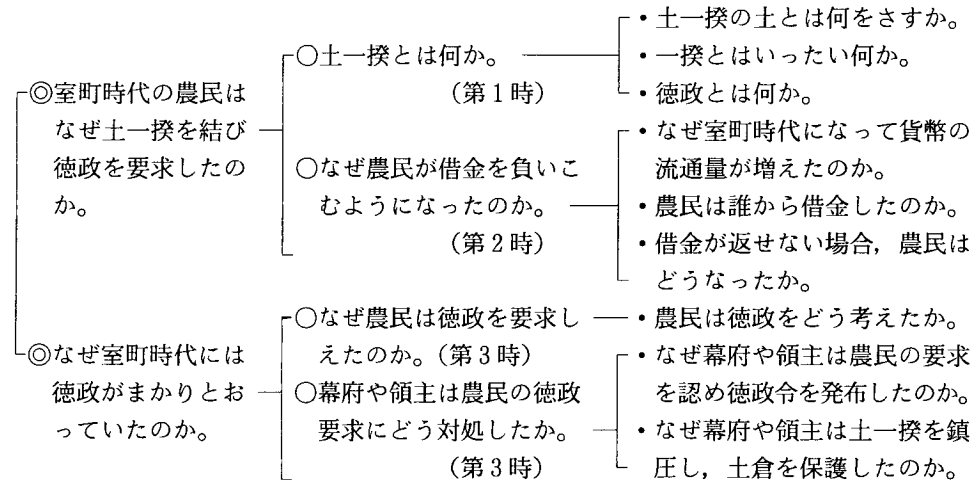
さらに、中世後期に見られた「土民こそが徳政を要求する権利をもつ」という主張に着目し、その根拠を解き明かす。中世において徳政は復活・再生を意味し、もとへ戻る、あるべき姿に戻すことであると考えられていた。土一揆の徳政要求は、土地を開墾することで土地に生命を与え、本主のもとから所有が移転した土地を本主が取り戻すことで土地が息を吹き返すという「地発(ジオコシ)」の観念や慣行を前提として行われた。つまり農民がそれを主張しえた背景には、農民の耕作地に対する所有意識の確立と、それを通しての百姓身分の形成があったと言うのである。またそうした徳政観念からすれば、土一揆の徳政要求が単なる債務の破棄ではなく、世の再生・復活を迫る世直しの性格も併せもっていたことが明らかになる。天下一同の徳政を要求した嘉吉の土一揆は、その例証となる。

(2) 授業モデル「土一揆と徳政」のねらいと構造

ここでは、上記の土一揆理論を組み込んだ中学校歴史的分野の授業モデル「土一揆と徳

政」(3時間相当)を提示する⁹⁾。この授業モデルの直接のねらいは、中学生の一般的な土一揆認識、徳政観の修正を図ることにある。しかし、完全な投げ入れ教材として開発するのではなく、通常の通史的な授業の流れに位置づけて学習できるように配慮した。そのために、集合心性の視点だけでなく、時代との関わりも重視した。とくに土一揆をめぐる農民土倉、幕府の関係については、脇田晴子らの研究を参考にした¹⁰⁾。

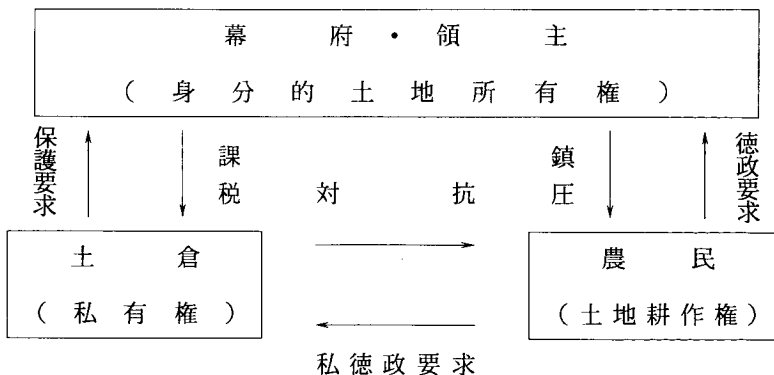
1. 目標： 中世民衆の集合心性を手がかりに、土一揆の意味を探求する。
2. 主要な問いの構造



3. 主要な知識の構造 (上記の○の問いに対応し、各時の到達目標に該当)

- ① 土一揆とは一味神水により成立した農民の団結であり、徳政を要求した。
- ② 農業生産力の発展にともなう商品経済の浸透と、農民の自治意識の高まりによる惣の成立は、農民や惣に貨幣を必要とさせるようになり、借金を負いこむことにもなった。
- ③ 室町時代の農民は、徳政を仮死状態の土地(物)に生命を甦らせることと考え、本来の持ち主(耕作者)が土地を取り戻すことは正当な行為と見なしていた。
- ④ 封建的土地所有に立脚する幕府や領主にとって、農民の要求も無視できず徳政令を発布した。だが土倉の税への依存度も大きく、基本的には一揆を鎮圧しようとした。

〈幕府・領主と農民、土倉の関係〉



4. 授業モデル

	発問・説明	教授・学習活動	資料	予想される生徒の回答ないし認識
第1時 導 入	1 室町時代とはどんな時代だったのだろう。教科書の年表からわかることを答えなさい。	T 発問し指名 P 答える	・教科書の折込み年表	・南北朝の対立、最初の土一揆、応仁の乱、山城国一揆、加賀一向一揆など、戦乱や一揆が目立つ。
	2 このようなところから、室町時代は「一揆の時代」と言われています。資料①を見てください。土一揆が毎年のように起こっています。国一揆や一向一揆も土一揆の発展したものと考えられます。では、土一揆とはいったい何だろう。この問題を今日は考えてみましょう。	T 資料提示 P 資料で確認 T 課題提起	①おもな土一揆年表	・室町時代にはとくに土一揆が頻発している。
展 開	3 まず、土一揆の土とは何のことなのか。	T 発問し指名 P 答える		・土民とは、土着の人、主として農民をさす。
	4 次に、一揆とは何だろう。一揆と聞いてどんなイメージをもつか、各自カードに書きなさい。では、発表してもらいましょう。	T カード配布 P カード記入 T 7-8人指名 P 答える		・苦しい生活に耐えきれなくなった農民たちが、集団で領主などを襲った暴動。
	5 みんなのイメージでは農民の暴動というのが多いようですが、本当はどうだったんだろう。実は、これが一揆のようすを描いた絵です。これを見て気づいたことを発表してください。	T 資料提示 T 発問し指名 P 答える	②一揆を結ぶ人々（一味神水）の絵	・神社の境内で集会を開いている。お椀で水を飲んでいる人がいる。皆そろって笠をかぶっている。何か大事な話し合いの最中のような。
	6 農民たちが神社に集まり、神泉の水を回し飲みしているところですよ。いったい何のためにこんなことをしているのだろう。	T 考えさせる T 2-3人指名 P 答える		・何かの誓いを立てること。団結すること、など。
	7 これとよく似た儀式は、今でも結婚式の神前で夫婦固めの杯などに見ることができます。そうすると、一揆とはいったい何を意味するのだろう。	T 説明し再度 課題提起		
	8 一揆というのは一味とか同心という言葉と同じく、団結することを意味します。つまり、一揆(団結)のあかしとして人々は神社に集まり、誓いの文書に署名した後、その紙を燃やして神泉の水に混ぜ、皆で回し飲みしたのです。こうした行為は一味神水と言われます。	T 説明し板書		・一揆=団結(一味、同心) ↓ 土一揆=一味神水により成立した農民の団結
	9 こんなにしてまで団結するというのは余程のことだと思うんだけど、一体何のために土一揆は結ばれたのだろう。資料①から考えてみよう。	T 発問し指名 P 答える	①おもな土一揆年表	・徳政、年貢反対、守護に反抗などがあるが、とくに徳政が多い。
	10 とくに徳政の要求が多いですね。こんなところから土一揆はまた徳政一揆とも言われます。では徳政とは何だろう。鎌倉時代に有名な徳政令が出されていますね。どんな内容だったかな。	T 説明し板書 T 発問し指名 P 答える		・土一揆…徳政を要求(徳政一揆)
	11 もう一度資料を確認してみよう。これは幕府が後家人を救うために出したのですが、今度は農民たちもそれを要求するようになったのです。	T 資料提示し 説明	③永仁徳政令	・幕府が武士を救うために、借金の棒引きなどを命じた。 ・すでに売却・質入れた土地の無償返還、借金の帳消しなど。
	12 以上のことをまとめると、土一揆とはどのように説明したらよいですか。	T 発問し指名 P 答える		・土一揆とは、室町時代の農民が徳政を求めて団結したものである。
	13 今日の学習で、「わかった!」と思うことをカードに書いてください。	P カード記入 T カード回収		

	発問・説明	教授・学習活動	資料	予想される生徒の回答ないし認識						
第2時 導入	1 土一揆が徳政を求めたということは、農民に借金があったことを意味します。今日はなぜ農民が借金するようになったのか、またその結果どうなったのかを考えてみましょう。	T 課題提起	④貨幣流通量の推移	<ul style="list-style-type: none"> ・お金に要るから。不作で年貢が払えなくなったから、など。 ・鎌倉時代の後半から室町時代にかけて貨幣の流通量が増えている。 						
	2 なぜ農民は借金などしたんだろう。 この資料④からわかることはありませんか。	T 発問し指名 P 予想を発表 T 資料を提示し発問 P 答える								
	3 なぜ、室町時代になってとくに貨幣の流通量が増えたのだろう。	T 発問 T 教科書をもとに説明し板書								
展 開	4 貧しくなった人だけが借金したんだろうか。	T 資料提示 P 答える	⑤山城国小野庄の債務	<ul style="list-style-type: none"> ・生産力の発展→商品経済の進展→年貢が金納に→貧富の差拡大→農民も借金 ・農民個人で借金することもあったが、村単位の場合が多かった。 						
	5 なぜ、村が借金などしたんだろう。 この頃の村は生産力の発展を背景に惣という自治的なまとまりを作っていました。惣では領主への年貢を共同で請け負ったり、用水を管理したりするために、多額の費用が必要でした。そのため土地を担保に借金することが多くなったのです。	T 問題提起 T 教科書をもとに説明し板書								
	6 以上のことから、なぜ農民(村)が借金を負いこむようになったのか説明しなさい。	T 発問し指名 P 答える			⑥京都の土倉・酒屋の分布図	<ul style="list-style-type: none"> ・生産力の発展による商品経済の進展と村の自治の高まりを背景に、農民は借金を余儀なくされた。 ・金貸し、お金もち、領主など。 				
	7 では、農民たちはいったい誰からお金を借りたんだろう。	T 発問し指名 P 予想を発表								
	8 この時代の金持ちで、金貸しをしていたのはどんな人たちだろう。教科書を見て考えてみよう。	T 発問し指名 P 答える								
	9 土倉とは、壁土で塗込めた蔵に質草を入れたところから名付けられました。当時の京都にはどの位の数の土倉や酒屋があったのだろうか。	T 資料提示し説明する								
	10 借金は簡単に返せたのだろうか。もし返せない場合はどうなったんだろう。 土倉や酒屋からお金を借りると、月5%（年率60%）の利息を支払わなければならない、農民にとって借金の返済は大変なことでした。その結果、農民の中には担保としての土地を失う者が増え、逆に土倉は土地を集積して繁栄していきました。	T 考えさせる T 資料提示 T 説明し板書					⑦土倉の土地集積	<ul style="list-style-type: none"> ・室町時代には土倉や酒屋などが高利貸しをしていた。 ・京都には土倉・酒屋とも300軒をこす数があった。 		
	11 以上のことから、農民たちはなぜ土一揆を結んで徳政を要求したのか、説明してください。	T 発問し指名 P 答える								
	12 また、資料①を見て、土一揆が頻発したのがある地域に集中していることの意味を考えよう。 土一揆はどんな地域に多く起きていますか。 それはなぜですか。説明してください。	T 問題提起 P 考える T 発問し指名 P 答える T 発問し指名 P 答える							①おもな土一揆年表	<ul style="list-style-type: none"> ・土地を失った農民たちは、生活のために団結して徳政を求めた。 ・土一揆は京都・奈良一帯に集中的に起きています。 ・土一揆は、商品経済が発達し土倉の多い畿内一帯に頻発した。
	13 今日の学習で「わかった」ことを書いて下さい。	P カード記入								

	発問・説明	教授・学習活動	資料	予想される生徒の回答ないし認識	
第3時 導入	1 これまで、土一揆とは何か、なぜ農民は借金したのかを考えてきましたが、今日はまず土一揆の具体例を見ることから始めよう。	T 資料提示 T 資料朗読と T 語句の説明 T 課題提起	⑧嘉吉の土一揆（建内農記）		
	2 農民たちが団結して土倉に迫り、それに土倉側が対抗する様子がよくわかりますね。それにしても、なぜ農民は徳政を要求することができたのだろう。初めにこの問題を考えてみたいと思います。				
展 開	3 仮に皆が土倉だとして考えましょう。農民に土地を担保にお金を貸しました。ところが、農民たちが集団でその借金をとり消しにしろとか、売った土地をただで返せと言ってきたらどうしますか。農民の要求はもっともだと思いますか。みんなの意見をカードに書いてください。 では、意見を発表してもらいましょう。	T カード配布 P カード記入 T 5、6人指名 P 答える		・農民の要求はあまりに一方的であり、応じられない。農民の気持はわかるが、要求は不当だ、など。	
	4 なぜ、そんな不当とも思われる徳政要求が繰り返してきたんだろうか。	T 考えさせる T 資料提示し朗読させる	⑨中世の徳政思想	・土地を本来の持ち主（農民）に取り戻すのは仮死状態の土地を甦せる正当な行為と考えられていた。	
	5 だから農民は堂々と徳政を要求できたんですね。しかし資料⑧で見たように、土倉側はそれを認めず対抗しようとした。では、幕府や領主は土一揆に対しどんな態度をとったと思いますか。	T 発問し指名 P 答える		・幕府は土倉を支持し一揆を鎮圧しようとした。農民を支持し徳政令を發布した、など。	
	6 どちらが正しいだろうか。土倉を支持したと思う人。農民を支持したと思う人。	T それぞれに P 挙手させる P 挙手する			
	7 ではまた資料①を見てみよう。土一揆の結果はどうなっていますか。	T 発問し指名 P 答える	⑩おもな土一揆年表	・徳政令が出された場合と、鎮圧された場合の両面がある。	
	8 つまり、幕府や領主は農民の側に立つ場合と、土倉側に立つ場合の両方があったんですね。なぜ、そんなことになったんだろう。	T 考えさせる			
	9 まず、幕府が土倉を支持したのはなぜだろう。	T 発問し指名 P 答える		・土倉はお金持ちだから。徳政を認めていたら経済が混乱するから。	
	10 ではこの資料⑩で確かめましょう。	T 資料提示 T 説明する	⑩幕府の財源	・幕府にとって、土倉や酒屋からの税金は重要な財源であったから保護することが必要であった。	
	11 次に、幕府が農民の要求を支持したのはなぜだろう。	T 考えさせる T 説明する		・中世社会では領主の土地を農民が耕作して年貢を納めていたから、農民が土地を失うことを幕府や領主も座視できなかった。	
	ま と め	12 最後に、土一揆と徳政をめぐる幕府・領主と農民、土倉の三者の関係を図を使って説明しよう。	T 説明する		<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 5px;"> 幕府・領主 (身分的土地所有権) </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;"> 保護 ↑ ↓ 課税 土倉 (私有権) </div> <div style="text-align: center;"> 徳政 ↑ ↓ 鎮圧 農民 (土地耕作権) </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center; margin-top: 5px;"> ← → ← → </div>
		13 今日の学習で、「わかった!」と思うことをカードに書いてください。	P カード記入		

4 授業の分析と評価

(1) 授業実践の概要と分析の方法

先のモデルに基づく授業を、1992年7月15日(第1時)・16日(第2時)・17日(第3時)の3日間、筆者の勤務する福岡県糸島郡志摩町立志摩中学校の2年4組(生徒数36名)を対象に実施した。ちょうど鎌倉時代の学習が終了し、これから室町時代に入る最初の段階に位置づけた。普段は活発な意見が飛び交う楽しい学級であるが、慣れない研究授業であるせいか子どもも緊張し、全般的に固さが見られたのが残念である。以下、各時間の子どもへの反応および認識の変容の分析を中心に、授業とモデルの評価を行う。

子どもの反応については発言内容を、また認識の変容に関しては、各時間の初めと終わりに(正確な配布の時期と指示内容については、授業モデルを参照)各自に記録させた個人カードを分析することで、明らかにする。個人カードの分析に当たっては、記述内容を主要な概念ないし命題ごとに整理し、その結果を数字(延べ人数)で示すことにする。

(2) 第1時の分析と評価

第1時では、一揆について、「農民が幕府に年貢を減らせと要求し、反乱を起こす。」ないしは「鎌や鍬などの農具を持ち、集団で押しかける。」といった反乱や戦いのイメージを描く子どもが圧倒的に多い。それは大学生の一揆イメージと見事に重なってくる。だが授業の終わりに書かせた感想では、「一味神水」に触れた者が多く、一揆を団結という側面でとらえることができている。また、室町時代に一揆が頻発したことや、江戸時代の年貢減免要求とは異なり、徳政を求める一揆が多かったことなどについて大半の者が理解しており、正確な土一揆像が形成されたものと判断される。

〔一揆のイメージ〕

反抗、反乱、反発	11
年貢反対、生活防衛	10
戦い(武器や農具をもって、押しかける)	8
実力行使(放火、物を奪う)	5
協力、団結、集団	4
その他(勇気、差別)	2

〔1時間目の学習でわかったこと〕

一揆は一味神水により成立した (一揆を結ぶために儀式を行う)	11
一揆は農民の団結をさす	7
室町時代は一揆が多かった	6
徳政を求める一揆が多かった	14
その他(徳政は借金の取消し、徳政は土地を取り返す、農民は苦しかった)	3

(3) 第2時の分析と評価

第2時では、農民が惣という自治組織を形成したこと、農民が個人だけでなく村単位で借金をしたことについてよく理解している。授業中の反応を見ても、室町時代には農民が用水や山野の管理、年貢の村請け、惣掟など共同で自治を行うようになったことは理解できていると判断される。「なぜ村が借金したのだろう」という発問にもすぐに反応があった。しかし、生産力の

〔2時間目の学習でわかったこと〕

土倉や酒屋が農民に金を貸した	15
金を貸せる金持ち(高利貸)が出てきた	9
土倉や酒屋は土地を集めた	5
農民は借金をして土地をなくした	12
農民は惣をつくり自立してきた	6
農民だけでなく村も借金した	3

向上によって農民の自治が可能になった側面の把握が弱いため、豊かな都市・土倉と貧しい農村・農民という図式を描かせてしまった感がある。

(4) 第3時の分析と評価

第3時では、農民の徳政要求について、「農民のわがまま」という意見が

3分の2を占め、その理由として「借りたものは返すべき」「貸した方はたまったものではない」といった現代の私的所有権に基づく意見が主流をなしている。「しかたがない」と答えた9人も、農民の生活の苦しさを主な理由としており、農民の要求を正当として土一揆を積極的に支持する意見は見られなかった。この時まで授業の中で幕府のことは触れていないにもかかわらず、幕府の責任を追求する意見が2つあった。これは、農民は支配されるものという意識が根強いことを示している。ところが同じ子どもが、「農民はけっこう強い」と授業の終わりの感想に書いており、農民に対する認識を改めている。

いつの時代も農民の生活は苦しい	2
大金持ちになった人や損をした人がいた (昔も借金する人や金を貸す人がいた)	7
米から金に代わっていった	3
その他(幕府はせこい)	1

〔農民の徳政要求についての見方〕

〔3時間目の学習でわかったこと〕

農民のわがまま	22	
理由	農民が金を借りるからいけない	3
	借りたものを返さないのが悪い	6
	買った者の土地になるのは当然	5
	貸した方はたまったものじゃない	1
	理由なし	7
しかたがない	9	
理由	農民だって生活が苦しい	7
	返せないようにしたのは土倉	1
	それなりの事情がある	1
その他の意見 (もとをただせば幕府の重税が悪い。幕府は農民の味方をしている。農民に土地は絶対いるが、土倉はただのわがまま。農民も金を借りない方がよい。)	5	

幕府の対応について	
・幕府は都合のいい方の味方をする	6
・幕府は要領がいい。せこい	4
・両方の板挟みになって困ったろう	1
・土倉を保護するかわりに税をとる	1
・幕府は土民の味方もするんだな	1
農民について	
・農民はけっこう強い。団結の力	3
・農民は年貢が納められなくなった	1
・農民には耕作権がある	2
土倉について	
・土倉は農民に腹を立てていた	1
・土倉は金で一揆の鎮圧を頼む	3
・土倉は損をした	1
徳政について	
・徳政とは本来の持ち主に返すこと	8
・土地には魂が宿っている	1
・売買の考え方が昔と今ではちがう	3
幕府と農民の関係	1

授業の終わりの感想には、幕府の対応に目を向けたものが最も多く、36%あった。この中では、幕府が土倉と農民との両方をうまく利用していて要領がいいととらえる子どもがほとんどだが、「土民の味方もするんだな」と幕府が農民を弾圧し、絞りをとることばかり行っていたという認識を改めている。農民については、生活の苦しさや貧しさだけでなく、

団結の強さと耕作権の主張にも着目している。

また、徳政に関する感想が多く、徳政要求が農民のわがままであるという意識は捨て切れないものの、今とは考え方自体が異なることを認識している。中世では物や土地に魂が宿っていると考えられていたことや、売買に対する基本的な考え方が今とはちがうことに関心を示した者が4名いた。私的所有観念と貨幣経済が極度に発達している現代社会の中において、中世民衆の心性を理解するのは容易ではない。この授業でも、子どもたちが農民の心性を完全に理解したとは言い切れないが、物事に対する考え方や社会常識そのものが現代とは異なることに関心をもち、その中で農民の行為について考えようとしたことは確かである。その点で、授業モデルの意図はほぼ達成されたものと評価する。

(5) 授業モデルの問題点

ここでは、実践を通じて明らかになった授業モデルの問題点を指摘する。第一は、「一揆とは何か」の探求がやや抽象的に流れたことである。その理由は、具体的な一揆の事例を取り上げずに、ただ資料②の絵（「一揆を結ぶ人々」）からのみ一揆の意味を探らせようとした点にあったようである。その絵は一味神水を描いたもので¹⁰、子どもたちの関心を引くのに十分と思われたが、研究授業での緊張感もあってか期待したような回答は出されなかった。やはり何らかの具体的な一揆と関連づけた資料の提示が必要であろう。

第二は、第一の問題と関連するが、子どもに一味神水の意味を十分に把握させることができなかったと思われることである。確かに、個人カードで一味神水に触れた者は多いが、それも用語のレベルにとどまっており、神との結びつきによる一揆の特別の力については理解できていないようである。「何のためにこんなことをしたのだろう」という問いに対する説明として、今にも残る神前結婚での夫婦固めの杯や直会（ナオライ）の風習などに触れたが、子どもにはそうした体験や見聞が少なく、必ずしも説得的な説明にならなかった。過去の人々の心性に迫るには、今の子どもたちの体験や関心と結びつく資料・説明が不可欠であり、その点での工夫が痛感された。

第三は、幕府が農民を保護し、徳政令を発布することがあった理由を十分に理解させられなかったことである。授業モデルでは、「徳政」を幕府・領主階級、土倉、農民の三者がそれぞれの立場でどのようにとらえていたかを明らかにし、三者の所有観念のちがいを対比させることを一つのねらいとしていた。子どもは土倉の立場と幕府が土倉を保護した理由は理解したが、幕府が農民を保護することで、従来の身分的所有権を維持していこうとしたことについては理解できていない。また、農民の耕作権と領主の土地所有権の関係があいまいなため、「土地を売る」あるいは「土地を担保に金を借りる」ことの実態がつかめていない。これは荘園制のしくみの理解を前提としたとらえ方であり、中学生の段階ではむずかしいのではないと思われる。

〈別府 陽子〉

5 おわりに

本研究では、まず一般的な土一揆認識の実態を明らかにし、その問題性を指摘した。次いで、土一揆認識の問題性をただすには、民衆の集合心性に着目することが有効ではないかとの仮説のもとに授業モデルを作成し、実験授業を行った。その結果、発問や資料に工夫の必要が認められたものの、仮説の有効性はほぼ検証された。今後は、土一揆に関するよりよい授業モデルづくりに努めるとともに、社会史研究の成果をふまえた歴史授業構成について一層の研究を進めたい。もとより、社会史が歴史認識や歴史像の組み替えに万能なわけではない。しかし、日常性への問いを重視するその姿勢は、歴史教師にとってのみならず、子どもたちにとっても魅力的にちがいない。

〈原田 智仁〉

【注】

- 1) 二宮宏之『全体を見る眼と歴史家たち』木鐸社, 1986, p.75
- 2) 原田智仁「社会史研究に基づく歴史授業構成(Ⅰ) -阿部謹也の伝説研究の方法を手がかりに-」(兵庫教育大学学校教育研究センター編『学校教育学研究』第3巻, 1991)
原田智仁「社会史研究に基づく歴史授業構成(Ⅱ) -近藤和彦の popular politics の研究を手がかりに-」(『兵庫教育大学研究紀要』第12巻, 1992)
- 3) 教科書会社略称: 中教(中教出版), 学図(学校図書), 教育(教育出版), 大書(大阪書籍), 東書(東京書籍), 日書(日本書籍), 清水(清水書院), 第一(第一学習社), 実(実教出版), 自由(自由書房), 三(三省堂), 山(山川出版社)
- 4) 授業者名と出典のみ示す。小学校の事例: 湯山厚(『歴史地理教育』1955), 山本典人(『歴史地理教育』1959), 鈴木喜代春(『社会科検証学習』1968), 山下国幸(『小学校日本史学習のカギ』1976), 歴教協(『たのしくわかる社会科6年の授業』1978), 本間昇(『小学校歴史学習の展開』1980), 桧垣公明(『社会科到達度評価事例集 小学6年』1983), 西浦弘望(『歴史地理教育』1985), 杉浦茂(同左, 1985), 西尾一(『第4期教育技術の法則化39』1987), 三浦憲子(秋田大学附属小研究授業, 1987)。
中学校の事例: 奥田尚五(『歴史地理教育』1955), 岩田健(同左, 1968), 工藤堯(同左, 1972), 並木茂文(『範例方式による中学校社会科指導細案』1974), 歴教協(『たのしくわかる社会科中学歴史の授業』1978), 原忠彦(『中学校の歴史教育』1979), 市川迪彦(『月刊歴史教育』1980), 歴教協(『新版 100時間の日本史学習』1980), 山本節子(『月刊歴史教育』1981), 樋口恢武(同左, 1982), 遠藤文雄(『歴史教科書を活用したわかる授業の創造』1984), 安井俊夫(『発言をひきだす社会科の授業』1986), 武田章(『歴史地理教育』1989), 中原隆『中学校社会 個を生かす課題学習とは』1990), 田宮弘宣(鹿児島大学附属小研究授業, 1990), 清水雅裕(『現代社会科教育実践講座・9』1991), 三橋正洋(第24回全国中学校社会科研究会宮崎大会, 公開授業, 1991)
- 5) 勝俣鎮夫『一揆』岩波書店, 1982
- 6) 黒川直則「土一揆の時代」(稲垣泰彦・戸田芳実編『土一揆と内乱』三省堂, 1975)
- 7) 本間昇「言語道断な徳政-小学生と土一揆-」(『歴史地理教育』1977.9)
- 8) 勝俣鎮夫『戦国法成立史論』東大出版会, 1979, 同『一揆』岩波書店, 1982
笠松宏至『日本中世法史論』東大出版会, 1979, 同『徳政令』岩波書店, 1983
- 9) 本授業モデルの作成に当たり, 現兵庫教育大学大学院生秋元直樹, 二井正浩, 西端幸信, 野村秀樹, 岩瀬康幸, 川上周二, 栗栖卓男の諸氏から多大なご協力をいただいた。
- 10) 脇田晴子『室町時代』中央公論社, 永原慶二『内乱と民衆の世紀』小学館など
- 11) 勝俣鎮夫文, 宮下実絵『戦国時代の村の生活』岩波書店, 1988, pp.26-27

【付記】

土一揆の理論研究ならびに授業資料の蒐集の過程において, 本学社会系教育講座の河村昭一先生には多大なご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。